

2016年  
7月4日  
月曜日上村 敏之 教授（財政学）  
**依存と自立**

です。

別のアルバイトで、私は学習塾の先生もやりました。生徒に教えるということが、いかにしんどいか、それによって所得を得ることが、いかに大変か、そのアルバイトで知りました。とても苦しい経験でしたが、その時の経験が生きています。おそらく、苦労や悩みが、私自身の自立に深く関係したのだと、いまは思っています。

教習所で初めて車に乗り、ハンドルを握り、アクセルを踏むと、車が動きました。このとき、私は感動とともに、恐怖を覚えました。命を奪う凶器にもなってしまうかもしれない車を、ひとりの人間が動かしているという恐怖でした。

この3つの経験は、すべて私が大学1年生のときの出来事です。皆さんは、自立を実感した経験はありますか。

か。できれば思い出して、あの経験は自分の自立につながる経験だったということ、整理してみてください。

皆さん自身も、例えば塾の講師のように、子どもの自立に関わるアルバイトをされている人もいるかもしれません。考えてもらいたいのは、過度な依存は自立をもたらしません。その瞬間はよくても、時間がたてば何も残りません。

会社などの職場でも、部下を育てようとしてがんばったけど、部下が育たないのは、その人に原因があるかもしれません。部活やサークルでも、同様のことがありませんか。教えることが、必ずしも自立をもたらしわけではないです。依存をもたすことすらあります。

私が専門とする財政においても、起り得ることです。国や地方自治

私が、ひとりの人間として、そして、大学教育に関わるものとして、いつも向き合っているのは、「依存と自立」なのではないかと思えます。大学生のみなさんは、社会に出る前の、最終的な自立の階段を上ろうとしています。社会にでて、所得を得るようになれば、いわゆる経済的自立になりますが、その経済的自立を得る前に、どのような自立が、大学生である皆さんに、実際に生じるのでしょうか。

私自身が大学生であった頃、自立しているなという実感があつた出来事が、いくつかありました。大学に入る前の春休みに、各地の中学校に、体操服を販売するアルバイトをしました。手渡しでいただいた給料袋に入っているお金をみて、えらく感動した思い出があります。思えば、この感動が自立の実感だったの

体は、よくNPOに補助金を給付することがあります。もともと、NPOは、何らかの社会的な目的をもって結成され、活動している団体で、この意味において自立しています。そこに補助金が入ってきます。すると、NPOの組織が補助金に頼るようになり、補助金がなければNPOを運営できなくなる可能性があります。しまいに、補助金をとってしまふことすらあります。こうなれば、もともと自立していた組織が、行政に依存するようになります。

皆さんの部活やサークル、アルバイトやゼミなどでの悩みや経験は、「依存と自立」に関わる問題だと考えてください。そして、皆さんの周りの人々の自立に、皆さん自身が関わっていることを意識する。このことが、大切だと思います。 ■